

# 山西省一の美人

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年2月5日

「ガイサンシー（蓋山西）」とは、“山西省一の美人”という意味である。それ故に彼女は、旧日本軍の手で、村では一番に捕らえられ慰安所に監禁された。『ガイサンシーとその姉妹たち』は、本名、侯冬娥さんの人生を、同じように“従軍慰安婦”にされた女性たちの証言から描いたドキュメンタリー映画だ。

その上映シンポジウムの司会を引き受けた。10年かけて完成させた、中国人監督の斑忠義さんと知り合いだったからではない。必要でなければ言わないが、私自身、子どもの頃に性暴力にあったことがある。だからそうした体験を、沈黙を破って語るまでの果てしない時間とどれだけの重さがあるかは、わかるつもりでいる。まして被害にあった女性たちは、小さければ七歳、その多くが当時はまだ10代半ばの子どもたちだった。

2000年に東京で開かれた、民衆の手で旧日本軍の性暴力を裁く「女性国際戦犯法廷」。9地域から64人の被害女性たちが集まり証言をした。月刊誌のために裁判傍聴記を書きながら追体験をしていた私は、暗い闇の中で誰かに襲われるのではないかという恐怖に追われ続けた。でもそれは、実際の体験とは比較にならない。そして言葉のできない私は、今まで生きていてくれてありがとう、という感謝の思いを伝えるため、彼女たちをただ抱きしめる他なかった。

私の祖父は陸軍将校、父は軍医として中国戦線にいた。シンポジウムには、映画の中で加害者としての証言をしている元兵士の近藤一さんも参加する。娘ができて初めて、自分のしたことを恥じたようだ。つらいけれど向きあって証言を聞いてほしい。17日に、東京・神田駿河台の全電通ホールだ。